

イエスの願い

マルコによる福音書 14 章 32～42 節

今朝は、ゲッセマネの祈りと、それをめぐる弟子たちの在りようから御言葉に聴いてゆきます。

過越しの食事の後、弟子たちはみなイエスさまにつき従って、オリーブ山のゲッセマネに来ました。しかし祈りの場所には、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけを主イエスは伴われました。この三人は、これまでも側近に近い扱いを受けています。ヤイロの会堂司の娘の治療の時にもこの三人を伴われましたし、主イエスが高い山に行かれたときもお供をしています。そこで主イエスの衣が白く輝き、モーセとエリヤが現れて、イエスさまと語り合ったという出来事です。今日の出来事との関連でいえば、高い山、つまり日常から離れた場所で律法を代表するモーセと預言を代表するエリヤと語り合うことによって、イエスさまは神の言葉に照らしてご自身のメシアとしての歩みを整えられた。これも祈りですね。ヤコブとヨハネはこういう扱いを受けていたからでしょうか。この兄弟は、イエスさまがエルサレムに入られる直前に願い出てあなたが栄光の座にお着きになる時にはひとりをあなたの右に、もうひとりを左にとお願いしています。その時に、あなたがたは自分が何を願っているか分かっていない、あなたがたは、わたしが飲む杯を飲むことができるか、とイエスさまから問われ、彼らは出来ます、と答えるのですが、実際は何のことか分からなかったし、少なくとも、このゲッセマネの場面では、主イエスがもだえ苦しんでいる時に眠り込んでいました。「目を覚ましていなさい」とイエスさまからお言葉を与えられていましたが、目覚めていることが出来なかった。この個所で、「シモン、眠っているのか。わずか一時も

目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても肉体は弱い」と言われています。やはり人間の努力と申しますか、わたしたちのなかにあるもので解決しようとしてもできない。イエスさまが、わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい、と、ひどく恐れてもだえはじめて言われたにもかかわらず、眠りこけてしまった弟子たちは、結果的にイエスさまを苦難のなかに置き去りにしてしまった。一人ぼっちにってしまった。つまり同じ杯から飲むことは出来なかった。それはいかに勇ましい決意をしようと、わたしたち人間が人間である限り、自分の中にあるもので立とうとする者はすべてつまづく。例外なくそうなのだということではないでしょうか。

しかし、この個所で示されるイエスさまの姿、ひどく恐れてもだえはじめ、弟子たちの手も借りようとする姿、死ぬばかりに悲しまれる姿、このイエスさまの姿にわたしたちは何を思うのでしょうか。意外だと思われませんか。もっと堂々と英雄のようにしておられたらよいのにと申しますか。ここはどのように理解したらよいのでしょうか。試練を前にして祈りはどのような力をこの場面でもったのでしょうか。まずイエスさまの祈られた言葉をみてみます。

できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るように祈り、こう言われた。「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取り除けてください。しかし、わたしの願うことではなく、御心に適うことが行われますように」

この祈りを地面にひれ伏して祈ったというのです。繰り返し祈られた。ゲッセマネの祈りでは、神さまの意志とイエスさまの願いがぶつかりあう。そして、というか、しかし、というべきか、それでも神の意志にみずからを添わせようとする姿勢が保

たれているのがわかります。この個所に取り組んでいて、むかし篠田先生から聴いた話を思い出しました。先生が病院に入院しておられる教会員をお見舞いして帰り際にお祈りをした。で、そのとき先生は「神さまの御心がなりますように」と祈ったというのです。で、その方は無事退院なさったのですが、あとで先生に「治りますように」と祈ってほしかったと言ったというのです。これはそう仰った人の気持ちがとてもよく分かるというか、そうだろうなと思います。もうひとつ病院にからんだ話で、これはわたしの体験ですが、やはり教会員のお見舞いに行ったときのこと、帰り際に、先生も死なない程度の病気で一度入院するといいいですね、と言われたことがあります。それから20年くらいたってから狭心症で心臓にステントを入れる機会が与えられて初めて入院しました。心臓にステントを入れるのは白内障や盲腸の手術ほどではないにしろ、今では当たり前のようにされる処置ですし、踏み固められた道なのでそう怯えることもないのですが、やはり心臓を扱うこととカテーテルを入れてダメなら手術に切り替えると言われていましたので前日にリビングウィルを書きました。万が一を考え出すとこれは怖くなってくるわけで、最終的に神さまが必要とされるなら帰してくださるだろうというところにその時は落ち着きました。ただわたしは3年前に妹の最期を看取っておりますので、人が死の前に思い巡らすことの、こう逆巻くような苦しさに思いを添わせる体験をしております。ペテロたちがイエスさまが死を前にしてひどく恐れて悶え始めた時に、何を言ってよいか分からなかったというのも、他人の重すぎる苦しみにかける言葉がないということは確かにあるのです。そして、このときのゲッセマネの園のイエスさまの苦しみは、わたしたちの想いをはるかに越えている。このとき、イエス・キリストは二重の苦しみを負っていたのではないのでしょうか。のちにカルケドン信条でイエ

ス・キリストは「真の神にして真の人」と告白されます。真の人であるがゆえに肉体の弱さを持ち、飢え渴き、弱り、死の恐怖をもち、十字架で確かに死なれた。これは人間の本質をもっておられたということ、と同時に真の神であられたがゆえに、わたしたちに神の国を宣べ伝え、そのしるしとして癒しの奇跡を始めたとした力あるしるしを行われ、権威ある教えを説き、罪の赦しを宣言することがお出来になったという側面です。この「真の神にして真の人」というのはキリスト教の奥義に関わることでありまして、ユダヤ人とギリシア人の双方をつまづかせたキリストの奥義ともいうべき事柄です。ユダヤ人は人が神であるということを理解できない。ギリシア人は神がわざわざ人となるというのが理解できない。しかし人であるゆえに最大の敵であり、恐怖である死を体験することが出来、神であるが故に罪の赦しをお与えになることが出来る。その方が十字架に引き渡されて死ぬ。これは公開処刑です。十字架を背負って歩かされ、唾を吐きかけられ、侮辱され、裸同然の格好で釘付けにされ、さらしものにされて死ぬ。人として避けたい苦しみの死、恥辱の極みであるだけでなく、神の子が神に捨てられるという、わたしたちには想像できない生木が裂かれるような痛みをも負わねばならなかったイエス・キリストの葛藤と苦悩はわたしたちには推し量れない。人としての苦しみと神としての苦しみの双方を味わいつくされた。逆に言うと、わたしたちの感じる苦痛であるとか、悩み苦しみであるとか、そうしたもののすべては、このキリストの絶望と苦悩と死の怖れの中にすべて含まれる。抱き留められる。そのような死を、主はこれから迎えようとし、苦悩しておられる。ここを理解させてもらいたいのです。神はそのことを、わたしの救いのために必要なこととして決断なさった。神の御手から苦しみの杯が神の子に手渡されようとしている。それは苦い、死の杯であり、茶番ではない、

真実の苦しみであった。真の人として、真の神として、このようにイエスの苦しみのさまが記されることをわたしたちは深く、本当に真剣に受け止めなければならない。と同時に、この方の苦しみの深さに、わたしたちの絶望の一切が含まれるのだということ信じなければならないと言いたい。だれもこの場面でイエスさまの見せた悲惨さ、絶望の深さを前に、わたしのほうがと言ってはならない。人よ、あなたは神の判決をさしおいて自分が、と言いたてるのであるか。この死の壮絶な苦しみは、もはやわたしたちが神の助けなくして死ななくてもよいように、神なき死を味わわなくてもよいように、キリストが、神の子が、神に見捨てられて咎人(とがびと)として死ぬということです。この先に起きてゆくことはもはや結果に過ぎない。ユダの裏切りによって当局に逮捕され、弟子たちが逃げ、サンヘドリンでの裁判、そしてピラトの下での死刑の追認と十字架刑、それらの結果は、ここで、ゲッセマネでキリストが石臼で引かれるオリーブの実のように心を押しつぶされ、肉体を地に投げだして、しかし、「わたしの思いではなく、あなたの御心がなりますように」と三度祈り、「もうこれでいい。時が来た。人の子は罪びとたちの手に引き渡される。立て、行こう」と言われた時に定まった。それはイエスの反対者たちの勝利では決してなかった。不滅の業績がこのあと、この方によって打ち立てられる。罪と死の支配が打ち破られる。この方の死によって、すべての神なき死が滅ぼされる。キリストが勝利する。わたしたちのために苦しみ抜かれたこのキリストの姿を心に刻むことがわたしたちの慰めとなるのです。マルティン・ルターは「死への準備への説教」のなかで繰り返し、このことについて語っています。いわく、「あなたは、罪を、罪人において、またあなたの良心において見てはいけない。またいつまでも罪の中にとどまって罰に定められた人々において見てもいけない。～むしろ、あなたの

思いを転じて、罪を恵みの姿以外のところにはどこにも見ないようにし、全力を尽くして心に刻みつけ、また目の前に持っていなければいけない。その恵みの姿とは、十字架上のキリストと、キリストのすべての聖徒たちにほかならない。十字架のキリストがあなたの罪をあなたから取り去り、それをあなたに代わってにない、その息の根をとめてくださる。これが恵みであり、あわれみなのである。このことを堅く信じ、目の前に持ち、これを疑わないこと。心に銘じること。こうしてあなたは、あなたの罪を安んじてあなたの良心のそとに見ることができる。見よ、その時、罪はもはや罪ではなくなり、克服され、キリストのうちに吞まれてしまっているのである。キリストがあなたの死をご自分の身に負い、その息の根をとめてくださる。キリストがあなたのためにそうしてくださることを信じ、あなたの死をあなたのうちに見ることなく、キリストのうちに見るならば、死はあなたを損なうことはできない。それと同じように、キリストはあなたの罪をもご自身の身に負い、これを、あなたのために全き恵みによって、ご自身の義において克服してくださるのである。あなたがこのことを信じるならば、罪は決してあなたを損なうことはない。こうして、生命と恵みの姿なるキリストは、死と罪に対するわたしたちの慰めである。」

ゲッセマネでかくも苦しまれた主イエス・キリストの祈りの戦いは、わたしたちに、この真実の慰めを与えるためのものであったことを、わたしたちの心に刻みたく願います。

お祈りをいたします。